

新刊紹介

末燈鈔の研究

梅原 眞隆著

本書は著者が曩に公にされた『親鸞聖人血脈文集の研究』と同型のものであつて、『末燈鈔』に關する著者の眞摯な研究の結果の發表である。著者は本書に於て嚴密な本文の校訂を行ひ、それに附するに周到な「解説」研究」を以てし、更にはじめに著者の最も權威ありと認められた、越後淨興寺及び越中勝興寺の『末燈鈔』右寫本の卷首並びに奥書を五葉の玻璃版として掲げてある。而してその本文の校訂をなすに當り、著者の細心なる注意は各方面に向けられ、前に挙げた二つの古寫本及び承應年間の古版本を比較對照する外、專修寺並に本願寺所藏の親蹟や、法雲寺所藏の專空、眞智の書寫本や、善性編の『御消息集』や、『血脈文集』などに就いて、『末燈鈔』所收の親鸞聖人の消息を探り、これを參酌して、文學の出沒、假名遣の相違なきまでも委しく傍註に示すと共に、從覺上人の編輯方針にもこづき、當時不明であつて、著者の探查考究の結果、年時等の明らかになつたものがあるから、配列の順序をこれに從つて更改して出してある。即ち全編二十一通が

今は原型の一、十九、二、十一、八、三、四、五、六、七、二十、九、十、十二、十三、十五、十四(十五)、十六、十七、十八、二十一の順序に掲げられ、且つ原型の第十九通の如き今は第二、第三の二通に分たれ、第七、第二十の二通の如き第十一通の一つに合せられまた原型の第十五通が兩分されて、その袖書が第十四通と共に今の第十七通に成り、その本文が第十六通に成つて載せられてあるのである。そして各通の後に何れも私註を記し、かくの如き配列の更改を行つた所以なきに就いて論述してあるが、それは大概首肯し得らるゝ意見のやうに考へらるゝ。猶また卷末に付せられた「解説」研究は「末燈鈔の編者」羽州版の「跋」、「編輯の時處」流傳の概觀、「形式題號調卷及び編輯方針」等の七項目より成り、『末燈鈔』に關する諸方面の書史學的研究を簡明にして要領よく示し、その効果を收めて居る。

蓋し本書の如きは、著者がその「解説」研究の終に自らいつて居らるゝ通り、『末燈鈔』の思想内容について論述し、研讀さるべきものゝ素材に供せらるゝものであつて、いはゞ著者としての豫備研究の發表といふに過ぎぬ。けれども我等は現今の教學界に考證史家は文献の研究に専らであつて、内面の思想を探ることを忘

れ、思想の探究者は内的思索に沈潜して、史的眼識に盲目なるもの多く、この兩者の連絡を缺くことを、常に遺憾として居るものであるが、そこに著者の如く絶えず優れたる思想方面の研究を示されながら、然かも一方かゝる忠實な文獻の考證研究を發表せらるゝのを見、殊に學界のために心強く思ふと共に、著者に對して多大の敬意を表せざるを得ないのである。そしてかくの如き勞苦を拂はれた豫備研究を素材として、更に進んでその内容に立ち入り、そこに生るべき「親鸞聖人御消息の研究」の出づる曉を著者の書後に於ける約束のまゝに、多くの期待を以て俟てるものである。

(廣瀬)

唯識學概論

玉置 韜晃著

序論、本論、結論の三部に分れ、序論に於ては、所謂「唯識學」の發生の由來、發展の経路、及び弘傳の歴史を明にして居る。本論にては「唯識の意義」「阿頼耶論」「四分三類境論」「三性三無論」の四章を分ち結論にては「唯識學の佛性論」「唯識學の流轉と還滅」の二章を分ち「所謂唯識學を概論せられたものである。既にその書名の示す如く「概論」であるから、深くその思想に到徹せんとする努力はないけれども、其思想の全般に亘りて、系統的に平明に解釋せられてあるのである。

から、「唯識學」を修めんとする者にこりては、好箇の参考書である。(菊判二六一頁。價二・五〇、龍谷大學出版部)(K生)

自然科學と宗教

佐藤 定吉著

私は學問である自然科學は、當然宗教と云はるゝ體験の領域に對してはその限界をもつべきものと考へて居た、併しその限界の考へ方について疑問を持つて居たものであるから本書に接した時其の題目の上に、直觀的に私の從來の疑問に對して學問的解釋をもたらしめるものだを感じたのである、がその序文を讀み、本論を通觀する事に依つて私の直感か獨斷である事を知つたのである。此の書は著者も既に本論の中に屢々「……此の聖句を科學の方面から學んで見たいと思ふ」云か「……以上の科學的事實が啓示することの教訓を學んで見たい」云か「……此の眞理の御靈について電子論の立場から考へて見たい」なご云はれて居る如くそれは要するに此の所謂「信仰の科學化」であり更に私に云ひ得はしむれば「科學の基督教化」の著書であつたと思ふ。勿論本書の如く宗教的體験の上から科學的事實の上に神の恩寵を感じ神の靈能を體感する所に、そして又聖句を科學的事實の上に辯證する云ふ事の上にクリスチャンとしての此の本書のもつ價值が存する

のであらう。そしてそれはやがて本書が學問的反省からの所産でない事を示すのである。學問的立場から宗教と科學との相關を論ずるならばその宗教とは基敎回教佛敎等に對する趣捨の上に考えられたるものではなくして、只そこには宗教的體驗一般が考察の對象でなくしてはならぬ、此の宗教的體驗一般について自然科學が如何様に考察し如何様にその存在の域を許すかが、「自然科學と宗教」なる題下に於いて論ぜられる問題であると思ふ。それであるからかゝる題下において論ぜられる事は「信仰の科學的辯證」でもなければ「科學の宗教的辯明」でもないかゝる立場から宗教と科學との相關を關せんとする時そこには獨斷がひそみ、ドグマが讚在する。かくして科學の冒瀆と宗教の否定への最初の歩みとなる宗教と科學との相關はそれが學問的論議である限り學的反省の上に考察されねばならぬやうに思はるゝ。こもあれ科學的事實の上に宗教の——特に基督敎の——教義を見んとするものは、そして又教導と云ふ立場から科學的事實を如何にして教材とせんとする即ち科學的事實の教義化を考へる敎家——特に基敎家——の一讀すべき著書でもあらう？ 妄評多謝(菊版洋裝、價四・五〇錢、東京芝區八幡町二五厚生閣發行)(T生)

佛敎聖典概論

深浦 正文著

この佛敎聖典概論は著者が、昨年出版したる佛敎研究法と相俟つて姉妹篇をなすものであつて、兩者の間には多少の出没廣略がある。之を一言にすれば本書は恰も佛敎研究法の内容の第一部藏經篇の系統的に續釋されたもの即ち前書が總論的内容の記述なれば本書は各論的構成の論書であらう。而して著者が、云ふてゐるゝ如く、苟も佛陀の眞生命に觸し佛敎の眞隨に徹せんとするものは、先づ其全思想の無盡の寶庫たる佛敎經典を繙讀するに躊躇せぬであらう。然れども其研究の根本資料たる大藏一切經は質量共に廣汎なる者でありて、初學の徒(或は老學者と雖も然らん)は容易にその適經を尋求する事が出来ないから従つて經の要綱を捕捉する事は困難である。それが爲に、多くの學究者はやゝもするゝその取材運用を誤り、開扉討查の自由に試み得らるゝ無比の寶藏も戸が開かれずして終るゝことであらう。これが現下旺んに赴きつゝある一般佛敎研究の大暗礁であつて、この暗礁を摧徹して初學入門の進路を指示するのが急務中の急務であるにもかゝらず遺憾なるここにはこの方面に手をつた人は稀れであり、且つあつても吾人の喝を愈するに充分なる著は一も之を發見するこゝが出来ない。然るにこの方面に留

意されて先に佛教研究法を公にして佛教研究の實際的方法を敍してこれが參考資料を提供された著者は、就中原典たる一切經典に對して諸般の綜合的、合理的解明を試み、佛教入門者の活路を開いたのが佛教聖典概論さいふ約三百頁に亘る好著である。今その内容を披閱するに、卷頭には二十七葉の各種大藏經の寫本及び版本の明快なる破璃版をか、けてあつて梵、錫、緬、暹等の貝葉寫本より、西藏、蒙古、滿州諸語の經典、さては支那、朝鮮、日本に亘つて翻刻された代表的の諸版本等何れも天下の絶品たる價值を失はぬ。本文に入つては、第一章佛陀の説法、第二章佛說編纂の由來第三章經典の成立、第四章經典の要素、第五章經典の言語系統、第六章巴利語經典、第七章梵語經典、第八章翻譯經典、第九章支那譯、第十章西藏譯、第十一章蒙古譯、第十二章滿洲譯、第十三章歐洲譯、第十四章日本譯、第十五章佛教聖典大系、第十六章結論、さいふ十六章十七節に分段せられ、最後に十六頁にわたつて精細なる索引が附してある。今それを解剖して見るに、第一章より第五章までは、諸種の佛教聖典の原本に關する總論的記述、即ち吾人の佛教原典に接する時になくてはならぬ豫備的一般的知識を述べたものである即第一章にては佛陀金口の對機説法の表現形式は種

々の語によつてせられた事を述べ、第二章ではそれら諸種の言語を以て傳へられた佛陀の説教が何時、如何にして編集されたかさいふ結論問題が議せられ、第三章にはその編集せられた經典の成立徑路を記したもので聖典史上重視すべきものである。第四章は經律論三藏の各一に對して逐次的字解を試み、後に經典分類の一形式たる十二分教の説を擧げて經典内容としその三要素を説明し、第五章には經典が口誦の時代より梵巴兩様の原語に書寫するに至つた徑路を提示し、經典の語系を説いてある。次に第六章と第七章には各々梵兩語の原本(三藏)の解説及び流傳、歐譯等を述べてある。第八章は第九章以下に記せらる、經典翻譯の序説であつて、第九章以下第十四章までは正しく支那譯を中心として西藏、蒙古、滿洲、歐米、日本等に翻譯印行せられた大藏經の書史學的研究が試みられてあつて本書の中心は此部にある様に思はれる。第十五章には前章までに述べたる聖典の史的關係即ち言語系統、印刻關係をば綜合統一して圖示し、第十六章には本書の結論として、大乘佛説、非佛説の論辯をば印度、支那、日本に亘つて極論し、經典の民衆化の必要を以て結んである。以上は本書内容の概観であるが、これによつて見れば批判の餘地はあるがこにかくかゝる種別

彙報

第一佛敎學研究室

□十月十五日午後一時より研究室例會を開催す。出席教授は舟橋、大須賀、稻葉、金子、廣瀨、上杉、梶浦の諸氏并に助手。

學會説立、書籍購入、所藏書籍貸借、研究室移動等について協議する所あり。午後三時散會す。

□往生論註宗祖朱點本の模寫は愈々近日中に金九經君に書寫を依頼するこゝになれり。(物部)

第二佛敎學研究室

□去る十月二十二日午後三時より第七教室にて例會を開く。當番講師左の如し。

一、大乘莊嚴寶王經のこゝ 櫻部 文鏡氏
一、般若心經に就て 教授 鈴木 大拙氏
猶、當日の聽衆、赤沼、泉兩教授外十數名なりき。

人文學研究室

□六月十三日午後三時から十三教室で大谷大學史文會例會を開催した神田喜一郎教授は「奈良時代に傳來

の刊本なき今日その先鞭をつけたこゝは大に多きせねばならぬ、この點から本書の出現は至難なる佛敎研究に一大光明を放つたもので佛敎初學者の福音書たるを失はぬ、しかして本書は総合的に「經典全體としての概論を下せるものであるから」その取材の如きも成るべく一般のものを案じて特殊のものを避け、その叙説にあつても専ら分明平易を旨として考證論議にわたらず一讀何人にも容易に經典そのものに對する普通の知識を了得せしめむこゝを期したものである。この佛敎研究の指針たる好著を佛敎研究法と共に推薦して置く。(菊版天金。正價三圓。京都市大宮通七條上、生田書店發行)(高柳)